

もころく

○かむのくむらのむむむ

○むむむむ

○むむのむむ

○てんよりむむむむ

○みやびのむむむ

○むむのむ

○むむのむむ

○むむむむ

Handwritten signature and text in cursive script, including the characters 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

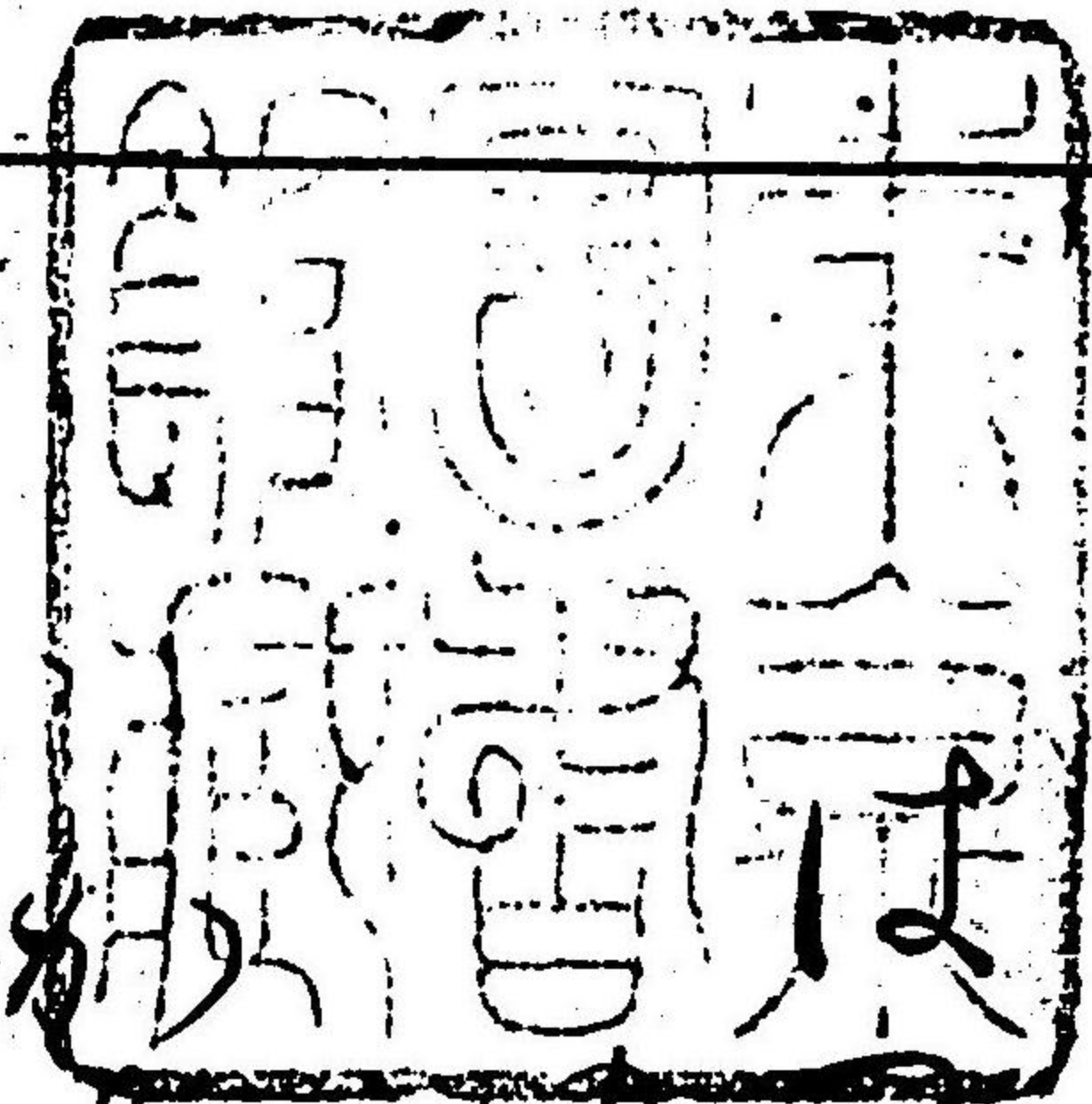
1
۱۸۶۹

۱۸۶۹

۱۸۶۹

۱۸۶۹

۱۸۶۹



明治十九年九月二十一日

1878

くさくさのさばりごとよあひおるはらへまづいへて、その、まなび
 を、えせぬひとたちのため、よみやま、かま、やま、あらんことを、その
 ゆるなきば、このくさくさよくははり、いらはさへかくとまは、なまごと
 をみやま、あてなはる、そのなることをまうて、ひとぐをいさなひ、ま
 のくさくさよ、あらんよなりゆくさまは、やがてからまじは、なくてまど
 たるよらることを、おまねくまうりまへし。

○むひつのねまう

あやのつ、み

よのなるよ、むひつもんろう、あまめくらなど、いれる、もの、あやまは、か
 らまじのむひつしきものを、ふつうあまちふるがゆるなり、よろこしのひ
 とは、あまよむまにたけりよ、ひとあゆるし、みづのちもほりりか不
 なまど、なべてのまどのうへにてらへば、かのくにびとやど、むひつもん
 うのあやまはなしといへり、こまもじのあや、三まんあまりもあうて、

むひつしきものをいれりなく、まどぐく、これをよみうるひとは、いと
 まれにて、なみなみのひとにては、そのなるばをもよみえず、さうとて、三千
 より四千までの、まじをあらざれば、ひとをりのようむまも、まじがく
 しとあまけり、まてもめんどうなるかぎりならずや、まがくにま、このむづ
 めしき、からまじをうけつへてより、むひつのかすはましとるなり、こま
 かにまなみまれば、あなまじよむものは、すいふんかすあやけれど、せま
 つうようのまじが、からまじなきば、このむづのしきまじを、よみえざれば、
 まづむひつのかへへのぞへらきて、みづのちも、あまめくらにひとと、あ
 さらたをるもいとあや、まのなくらあまほえたりとて、からまじをま
 らざれば、もの、やくにた、すと、こ、ろえんがへ、まじをより、こまらに
 ばなばせぬやあらも、まくなからぬまとなり、よのまづ一きひとに、むひつ
 のあやまは、かくもんをむやくなりと、まるにはあらで、むづのくへて、あま

のと一しき、の終りのしるるを、しよふがゆるなきは、もししるは
 入るばをれば、てがみのやりとりにて、百りさき入のようぐんも、さか
 うささいなりとさきば、しるにふきようなるものにて、はつかの三十に
 ちにて、四十七もじを、おぼえられぬふとなく、つきひもかねもいらぬけ
 なせば、たきのよろこびて、はなばざるものあらん、たとひとしいゝるも
 のにて、たちばちに、はなびえらるべし、かくのごとく、かなはたやまきもの
 にて、ちやうやうなるとは、むつの一さもじを、五絲ん十絲んまなびるもの
 と、おなじはたらきあるふとを、よのひとのあまぬく、これをさるに、しんち
 ば、わがくにには、むひつもんもうは、おきりはきりと、なりぬべー

○おもふよし

みうちのちはる

わがかなのくまいは、なにのため、あてどたるやといふに、わがくに乃、
 がくもんのみちを、たやましくせんとさるが、だいらちのもくして、にて、その

よしは、きでにきよせんせぬの、まばくともあの一や、あんせつやに、のそ
 らきくきは、いままらふに、あよばき、いまた、にわきらが、ごとき、いな
 にまむもた乃、めよみ、ころよかんさる、ところおほきて、さ、の、いふ
 ことあり、そはまづ、みくよちちみ、あやうがくかうのかせは、三まんのよ
 もあるうちにて、とくまのりつばなるがくかうは、十が一二にて、その
 不るはみな、くさぶいゝなるのがくかうならん、そのがくかうへ、あよふ
 せいとの、なればは、かなりくらしの、たつもの此こどもにて、なればは、こ
 まへみづのみなごいふたぐひの、ひんせんなるもの此まどもなるべし、ま
 のこどもらは、やうやく一二絲んの、二三絲んならでは、がくかうへ、かよふ
 こと、は、できぬものなり、はなはつかくがくかうへ、いでせあまふものも
 あり、こまをなせといふよ、だいらちまさんおともさく、つぎよは、いどは
 がない、よのなごよびんぼうひまなし、といふたごへもあるとなり、いな

のひんどのこどもは、をさないとき又は、あをばなをたらして、あかんぼう
をせふく、しつけらま、そとまとしどろおもなまば、くさのりうーのひ、うー
はのくちどりなどまて、ふうさくのたまけを、せねばならぬ、それゆゑがく
かうへ、ながくはいでらまぬ、いまわがくまのふんまやうは、まやうがくと
くやんのこときも、まなもじをほじへ、まば、こむつひくまて、をしふる
まひまいり、おぼゆるまはどのらま、かなのみをもちふるまどとならば、か
やうのこどもらま、ほづいろは四十七もじの、よみあきををしへ、そまより、
その四十七もじをもつて、くちまらふまどばを、まるすことををしへんふ、
一絲んの二絲んは、か、ちすして、しやうふも、しやしきもの、ふちよう
をたすくらゐのまどは、できるふちがひなし、かくのこどくなれば、がくの
うへまどもだしかぬる、ひんせんのももの、がまんして、一絲んか一絲んせん
は、がくかうへのほすまどふなるべし、さらばわがくふ三千七百万のひと

が、みなもんじをまり、ふみをつうせるまどもでき、いまのこどく、わがなを
だふ、まるすここのできぬものは、たえてなきやうふ、ならうとおもはる、
なり、かくてはま、よふかなのま、みまみやかふて、せいふのふこく、けんち
やうのたつしより、ぐんやくしよ、こちやうやくばの、ふまこなどふいさる
まで、みなかながきを、もちふるまどふならば、ふんじんあるもの、たまひど
りこれをよみえぬものなく、せいまいたやまくおこなまき、まらまてして読み
をおかまものなく、めてだまよとまるとし、ままばふべんなる、まなもじをそ
いして、べんりなる、かなのみをもちひんことは、こんふちのきうむと、わがど
もがらはおもふなり、あるひと、いまのよふして、まなもじをもちふるは
かどふのりてくがをゆき、なかけおねみてうみをはしるふことならま、ど
うして、ましやません、ならひゆくことをえん、といへるは、げにさる
ことなす。

○てんよりふりたるまを

かなのくじいぬんなにかし

さくねん六とつのもろなりむ、みのくにあなを不りに、おなきさ、やへ
 なりよりはや、ちさく、いろはあづきにて、や、くろさ、まめ、あまのふり
 かり、どころのとしよりは、六七十ねんむかしにも、あなじさまのまを、ふり
 るまどのありて、そのとしは、まどのをかみのりお不かりなる、よりて不
 うねんのまろしならむと、ものがるもあり、まろくつをまのむまかもの
 は、ときならぬに、てんまををあめふらすは、まさんとしのまろならめ
 など、さまくにおじつけ、まはそのまををいりて、くら入るものも、あり
 じとかま、ぬ。」

このことおひく、うはさたかくなりおきて、ぎふにちく、まんぶんにもか
 きのせ、とうきやうのまんぶんにも、ぎふけんには、みなまぬまめのふり
 じ、さたしければ、としわかきことこのみのひとは、ふるまめよころをど

いめ、つひにむぎを不りかすがとどほりにても、ことなりなるまををひろひと
 りぎふにても、あるはやねのうへ、まををやしのうちにて、つねにはみ
 なれぬまをを、ひろひるまかものもお不かりき。」

あるひ、むしをとらへむとて、たまさまごんのまなる、とあるやぶのうち
 にいり、お不いなるすぎ(このすぎは十ねんまへのころつるのすをかけ
 してとありとてそのなたかし)乃もとにいたれば、まのき(榎)せんたん(棟)
 のみ、あびさしくふりまきて、まれには、あなを不りにふりさりと、いふな
 る、まをで(牛尾菜)さんさらい(土茯苓)のみもあり、まのきふなどにて、ひろ
 ひたる、はじ(樅)うるま(漆)のみもありて、いつまもにくから(殼)はまて
 しもなくて、たいたねのみなれば、いかさましをではじさんさらいうるし
 のみは、あづきふじまめなどと、そのかちによりまをば、さてこそみなまぬ
 まめなりけりと、たもひあやまりたるものならめ。」

よりてあもふに、まへにうましくいせきたるやぶは、あどりのねぐらには、
くじまやうのところなまは、あるときはあはたのこどりきたりて、かのそ
ぎにとまり、かつてをちこちにてつらばみたる。このみくさのみの、かなく
してこゑれがなきを、ひりぬたすこともあらん。さればこゝにふりしきとる
みは、一とびこどりのからだをとどりて、ふんのうちにまじりたるもの
あらん。あもひけきは、やがて六しやくばかやをひろひとどつたづさへか
へて、びんまたくりへあせ、びんのくちをとどししは、あもひのふんの
よすひありて、まがふことおのりせ」

くさまのたねの、あつひのち、あつちうこちうまひるがりてさかぬる、さま
くのてだておきおき、やうけまへまへのスるごとく、どりのあかたら
およりて、ひろかりさのぬることもあつて、すこしくあせんのこもよこ
ろがけたるもの、よくこゝろえをることあらなれば、あのみくさのみ

の、ちのうへふりしくり、さくねんまのみ、かざるべきことにあらす、
らつのもしも、みなねなまはすなるま、さくねんまかぎり、ことさらま
あつちへ、ひとくのとまへなせしは、かくじゆつひあひま、ひらけゆくよ
のらまひひつきて、あせんのことお、こゝろをとどむるひとの、はしと
るまらしならんか、さればてんよりはめぬのふりたる、あつねんま、んの、
あつしひのあつで、ますくかくじゆつひのひらけゆく、かくじゆつひのせんらや
うならんか、あもふり、さつち、

○みやびのふんあやう

さぬるくせんせいのころ、あつちのはのらくあうきみがあつちられしと、
さひしんくゝることを、あるふみのうちにてみつるが、さあめつち
うたこゝろ、あつちひつちりからあつしぬ、ふせじまのよりゆき
よふけてあつちあつち、あつちあつち、あつちあつち、あつちあつち、あつちあつち

まくらみかよふも、どがなきも此は、そなのゝ、あんじのかね、さうどの
むしの絲は、ことよあはまむべし、

よくーともゆるきへきは、そなのかせ、つぎのくも、うちほけよあらそふ
ひとはゆるすのみか、句のむけのあしとの、よはのあもならで、みだる、
ばかりよはあらざるべし、ちくくちくちくえうのちうせきは、ゆるきのみか、句
さけのみだれは、このたぐひならせ、

つぎはらつてよきつゝむべし、されどすぎしこそきんふもくるじ、ゆく
すへをあもふもうるさし、たぐむひてこそ、

あるもなきもあどるは、まことなきひとのさえ、をうなのさえ、いなづま
のむげ、あふとみまもた、

うてきものは、みなづきのうぐひき、おらばのかせふさきたる、

おろきをむむものは、さき(茶器)、さけのさかな、おそむくら、うらうんのそ

な、やど、さす、すむし

よきはよくあしきはあしくけざやかなるは、うぐのまよく、やめるをうな、
ふうりうのそのうちなるべし、むか不ぞをきり、なすべきことをなして
こそいそめ、きひていあしへをこのみ、つぎをなをめづるとて、いかでい
そむ、よきがらつきみむよりは、ひををしむよきかじ、

○かなのふみ

うしへのえらゆうにして、かなふんきやうを、もちぬるひと、そくなの
らす、なるもよあ、ふけのとらうやうともあふぐ、ふんりのきみのふみ
をこ、よあぐ、

みなもとのよりともきやうが、みるはのひみけりよりぬしへ、おくられし
ふみ、(あつまかがみ四のまきにあり)

やしほよおとーまき、おんやけななびよ二むせのよようばうらちなを、きこ

しもあやほりな一ままなることなくて、むかへとりまうさせたまふべし、かくとだもひろうせらまたらば、二おどのなどは、おやけをくまらせて、むかしさまよおとするところもあるむ、おやけはてらうのおんこと、いさまはじめぬことなまとも、まそはやまのみやとばの四のみや、うちたてまつらせ、めうがつきてうせまき、へいけまさんじやうたうくらのみや、うちたてまつりて、おやうまうせんをすることなり、さればよくくまらためて、かまきをまらすすして、まひひひまらせらるべきなり、(はじめとをばりをばく)

とよとみひでよしこうが、らまたをたぢぢつかへらましくろ、をばりのくよ、たのまほごりまほむら、めうこうじ、まふてうへ、あうましくふみ、(めうこうじのやうと)

むかへし一ひじかーんほせり、まうじやくのらんやあそぶ、あしてごわらやー

じまうーらるべくそろなり、ひでよー

こはてんまやうのところ、かりやまのらくさのぢんよりの、ふみなりとぞ、
○うののえなし

きやうとよ、いけだうんどうとら入るは、うつしゑになあるひとなり、あるひ、こでつばらうぢ、このうんどうあひて、ぬしはうらをよますやといふふ、うんどうこへて、おのまうのみらはまら縁ど、だいをままへ、いまよみて、ろみむとらふ、さらばとて、かはのちどり、といふだいをいだし、たまは、まばらくかうへ、かふけて、

かまかはのかはらこじきのやまころもあかつきさむくちどりなくなり、とよみいで、まきば、つばらまをまきけるぞぞ、

これもまやうとよ、をかだもまけとら入るは、じううんぐらしやに、はらさるをのてなるが、いやしきそたらよもまき、ころぎしうひやさ

しく、つねふらうをこのみよゆり、またおしやまのさがのおくにうめの
きをおくうゑて、たのしみとすよのひとあだなして、うめのせんふんど
いへり、このをのこがよたるかたどて、さ・しま、を（おおくありしを、は
ぶきてこよもど）

たのし

ひさおのくものうへまでゆくものはつきみるよは乃こ、るなりけり

ひくし

あふぎみしをのへのさくらちりはて、たよのもれともなりおけるかな

おそ

うごくともゆくともみえぬかたつふりあゆみやまけむあとののこれる

そやし

とややほのみねよふるかどおもふまふのさばきまゆくゆふだうのあめ

いひし

むら／＼とまどのひかげまたつちりのよおもかるきはまがみなりけり

このうたは、おのがみのうへを、いふとおぼえて、こどもあはまなり、

とらさやうよりあはれよりへゆく、ふねのうちよてよめる

あでのいままぎ

かすかなるふねのまどよりいりきつ、つき／＼をどふうなばらのつき
まどろめばやがてみやをゆめよみてふねなるみをはまそれぬるかな
はてもなきおやうればらふさむきよのつきみるこ、ろたれにかたらむ

まほのくふにまかりけるとき、あのりさざとらふところの、とらめう

たいをみて

みららのちはる

なだわさるふねのさるべよともすひもみよのいひ乃ひとつなりけり

おなじときこふのをまよやどりて

こふのたまひそもとゆきりよるなみの おとをほくらにまぐよなりけり

結ぶたのさよよて

おん々のつのみ

おもはせも ひをかき結ぶつたびころをぬぎたさびくつはやまつらむ

かなのくまらをよめる

ほふちのなややす

いりやまきまなひのみちれあなもしはみよと、もにもひらけゆくらむ

おなしく

ふせしまのよりゆき

あまのやほとて、ろをふりおこすかなこそみよのたからなりけき

○結むけなほき

むるしあるのなるれひとつやふうふのものすみけりひとせよのな
あつさうなりけるころぬきびとたびくそのらへふりて、まものう
つはものやうくぬすみさうて、まはたへらのうちに、おながまひ
とつぞのこきりけるぬうふのものこのかまをぬきまきじとようあんし

て、よととあ、このかまのなるあうりてぬまけり、あるよぬきびとま
きのびりりて、まのひとしのあまをぬすみさ、ぬうりしてかきとて
ゆくふ、かまのらとあもりけきは、ひとりからふ、あなおとしく、このう
ちには、こたなどこそうりつらめ、とらへば、まひとりが、こよひのえもの
よりけり、とらひつ、まは、さふふ、あやしくかまのうらふ、うなる
こゑをれば、ぬすびとらくおとらせて、うのま、まて、らふけり、をんなめ
をさまして、ふんおしおけて、おんりをみきは、くさばうくたるのなるな
り、おされて、をどこをゆりおこす、をこのしうをぬぎて、おしのひのり
をながめつ、はんとてをうちて、あまのやうじんよりのけきは、あまび
と、らへをしくして、ぬすみさうみけり、とらひけるとなむ。

明治十九年四月六日御届
同年同月 日出版

(定價金五錢)

編輯兼
出版人

岐阜縣平民

小栗兵藏

岐阜縣美濃國厚見郡
岐阜中今町五拾番地

1446

津久志

○津久志の歴史
○津久志の地理
○津久志の産業
○津久志の交通

○津久志の文化
○津久志の教育
○津久志の観光

085435-000-6

特54-556

はつくさ

小栗 兵蔵/編

M19

DBC-0413

